

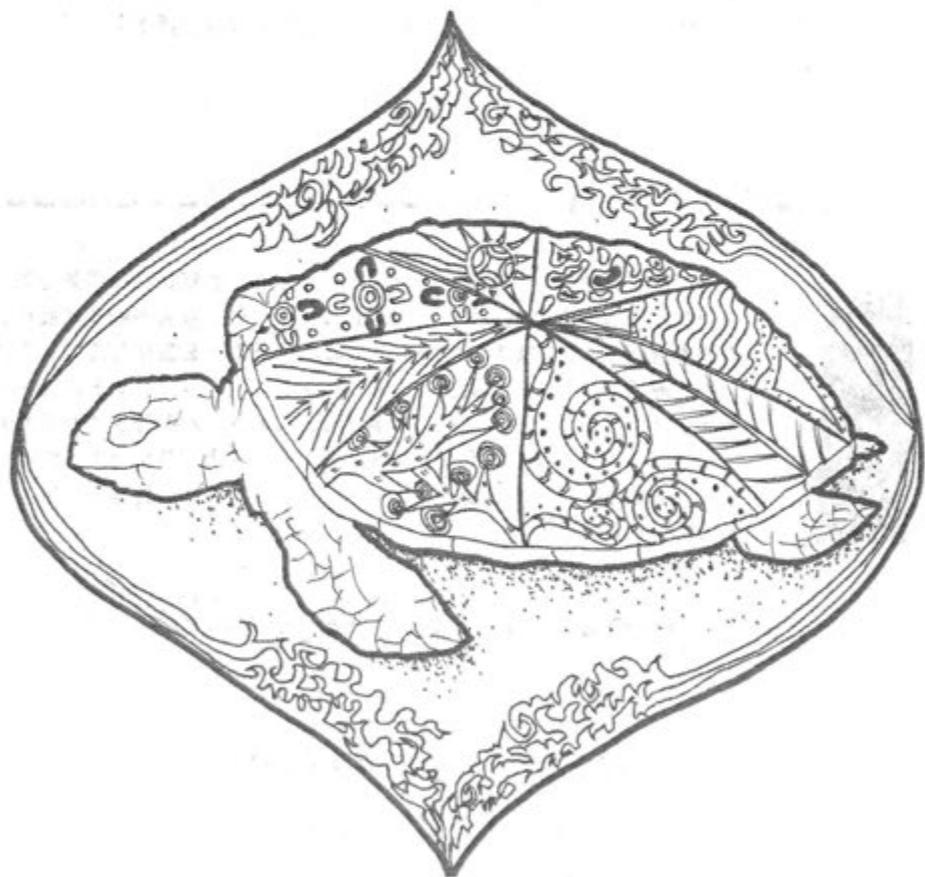
Marine Turtler

マリンタートル

特定非営利活動法人

日本ウミガメ協議会 機関誌

第7号



表紙の絵

会員の堀内千恵子さんが描いてくださいました。堀内さんはオーストラリアの民俗楽器ディジュリドゥに触れる機会を持ち、この民俗楽器を通して、アボリジニーの抽象的な図形ひとつひとつにきちんと意味があることにとても興味を持たれたそうです。それをヒントに、この甲らの中の絵がうまれたとか。素敵な絵をありがとうございました。



石壇でディジュリドゥを吹く堀内さん

マリントラターの表紙随時募集中！

絵が好きな方、好きではないけど・・・という方もぜひ描いてみてください。カラーでもモノクロでも結構ですが、印刷の都合上仕上がりはモノクロになってしまいます。皆さまのご応募お待ちしております。詳細は事務局まで。

ウミガメ携帯ステッカー -----



前号で、携帯電話用ウミガメステッカーの配布のお願い、制作費を支援していただける方を募集しました。数日後、さっそく蒼永印刷株式会社会長の照本善造さん、ご友人の大地昭さんにステッカーを製作していただけるのご連絡があり、赤、黄、緑、青のメタリック、ゴールドとたくさんの種類を作ってくださいました。照本さん、大地さんの御好意に心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。引き続き、ステッカー配布活動を行いネットワークが広がるよう頑張ります。今後も、皆様のご協力をよろしくお願い致します。

最近サーファーの間でうわさになっているそうです。

ステッカー活動にご寄付をいただいた方々、ありがとうございました。

中村周史、小島一行、松平陽子、安芸漁業協同組合 藤田淳司、金子友貴

7月末まで。順不同、敬称は省略させていただきました。



Contents

- 3 マリントートルー列伝 沖縄編その5
 「若月元樹と沖縄大学探検部の仲間達」・・・・・亀嶋 直樹
- 5 ウミガメの民俗3
 「知多半島のウミガメの墓1」・・・・・藤井 弘章
- 8 南知多ビーチランドのウミガメたち・・・・・黒柳 賢治
- 11 VAD00 アイランドリゾートで・・・・・平本 真実子
- 12 調査・研究
 「甲らの測定方法について」
- 14 事務局より
 NEWS!! 「ウミガメがご縁で・・・」
 「feverblue ×レミニッセンス コラボエコバック」
 「5年ぶりに明石で産卵！」

事務局の主な動き
第16回ウミガメ会議（黒島会議）のご案内
着任のごあいさつ
インターンシップの採用について
職員の異動について
いざという時に、携帯サイト
会計報告・お礼
グッズ紹介
編集後記

会報の名称マリントートルー (Marine Turtle)は、英和辞書には載っていません。つまり、教育的にはあまり相応しい英語とは言えません。ただし、米国では最近ウミガメ関係者をこう呼ぶことがあります。ウミガメを守りたい人や、ウミガメを研究したい人、立場上仕事でウミガメに関わるようになった人、ウミガメが好きの人など、ウミガメに関わる全ての人を、我々はマリントートルーと呼ぶことを提唱したいと思います。

マリンタートル列伝 沖縄編その5

「若月元樹と沖縄大学探検部の仲間達」

亀崎直樹

正直に言わせていただくと、私にとって沖縄本島は実に弱い島です。八重山や宮古に関しては、ある程度、砂浜を回っていますし、「どこのソバが美味しい」などの情報も備わっています。ところが、沖縄本島は広いし、浜やお店もたくさんあるので、どうも勝手が違うのです。で、何となく弱いのです。

1992年の頃でした。当時、琉球大学の学生だった菊川章氏や以前にも紹介した平手康市氏らと、沖縄県教育庁からの依頼を受けて、本島の産卵場の分布を調べ始めたのです。その頃、本島で沖縄大学の探検部が、糸満の大度海岸や座間味で、ウミガメの調査をしているという噂をきいてはいましたが、しばらくの間は特に接点はありませんでした。

彼らに初めて会ったのは、いつだったか、そして、どこだったかは、あんまり覚えていません。でも、探検部に所属している照屋琴子さんという学生だけは、その沖縄らしい純粋さが強烈に心に残り、彼女をきっかけに、彼らが調査をしている大度海岸に連れて行ってもらうことになりました。

ある年の産卵シーズン、八重山の調査を一日早く切り上げて、夕方那覇空港に降り立ちました。空港には照屋さんが迎えに来てくれました。ところが、紹介された仲間がすごいのです。金髪、モヒカン・・・・・・・・。こりゃ、なんじゃ？ 琴子さんとは正反対、純粋そうではないのです。で、載せられた車が、屋根のないボロボロのジープ。それが、大きな音楽を鳴らしながら、空港から糸満に向けて暴走を開始したのでした。私は、ただ、車の手すりをしっかり握っただけでした。



現在の若月元樹

大度海岸について頃には、もう、どっぷりと日が落ちていました。浜は静寂になり、モヒカン達は、交替で浜の見回りを始めました。この賊の長を務めていたのが若月元樹でした。ヒゲの若月はモヒカンや金髪などを束ねて、糸満を占拠しつつあるという感じでした。

夜、9時を過ぎる頃です。近所の小学生が浜にやってきました。まあ、賊と適当にじゃれあってはいるのですが、ある賊のメンバーが「おい、宿題やるぞ」といって、公園のベンチに座って、子供に宿題を教え始めたのです。その後も中学生が遊びに来るは、変なおっさんがビールを持って立ち寄るは・・・。私は微笑ましく、この光景を眺めたのでした。

この夜、結局、ウミガメは上陸しませんでした。明け方近くになり、那覇に向かって再び暴走を開始したのでした。慣れてしまったのか、賊の一味になってしまったのか、帰りの暴走は実に気持ちよいものでした。今、賊の長は、黒島研究所の長をしています。

「賊」のメンバー

(若月元樹)

沖縄大学の探検部がウミガメをやるようになったきっかけは、探検部の初代部長・上原浩人さんが釣りに出かけた大度海岸でウミガメの足跡を発見したことがきっかけとなります。上原さんは宮古の池間島出身で池間大橋が宮古島とつながる前の池間を良く知る人間です。この上原さんは高校卒業後、しばらくは池間島で海人をしていました。その上原さんが海人を辞めて大学へ入り探検部を作りました。その経験から海への造詣が深く、我々は色々なことを上原さんから学びました。

賊のメンバーたちはその上原さんから「ここはウミガメ産卵地」という言葉を聞き、那覇から車で30分の環境にウミガメ産卵地があることに驚きながら観察を始めたのでした。観察をするにあたって当時はウミガメの情報があまりにも少なく、美ら海水族館(当時沖縄記念公園水族館)の照屋秀司さんに電話で相談しました。照屋さんの第一声は「糸満でウミガメが産卵する浜があるとは知らなかった」という驚きの声でした。以降、照屋さんから色々教わり、座間味島や伊平屋島での調査、水族館の水槽での実験などをアルバイトとしてやらせて頂いたりしながら、ウミガメとの関わりが深まっていきました。大度海岸ではその後、これ

までのアカウミガメ以外にもアオウミガメやタイマイの産卵も確認されました。

ここで「賊」と表現されたメンバーは黄正剛、服部りえ、当真康由などで皆、温厚で品はあるのですが、ファッションセンスがずれていました。近くの小学校の女性校長が「学校に来てちょうだい、『こんな格好していてもいい人はいる。人は見かけで判断しては駄目』という教育には皆さんは持ってこいだから」と言われたこともあります。小学校には給食を食べによく行きました。

現在は探検部も活動が縮小し、ウミガメ調査からは手を引き、沖大自然観察クラブから現在は近くに住む小林茂夫さん操さん夫妻によって浜歩きが続けられ、その蓄積は今年で14年目になろうとしています。

沖縄大学でウミガメに関わった人は沢山いすぎて覚えていません。特に熱心に関わった方の名前を挙げておきます。(50音順)

阿部晴美(旧姓・喜久山)、新垣恵、上原浩人、小倉陽子、岸本奈々、国仲実千世、黄正剛、黄りえ(旧姓・服部)、河野勝広、当真康由、長山真、米谷琴子(旧姓・照屋)、渡辺祥彦

知多半島のウミガメの墓 1

日本列島には、ウミガメの墓といわれるものが各地に見られます。今までに把握したところでは、南は熊本県、大分県から、北は青森県までの沿岸部に点在しています。太平洋岸だけでなく、日本海側にも見られます。こうしたウミガメの墓については、民俗の報告書などでは無視されることも多く、まとまった情報はありませんでしたが、丹念に調べていくと、100か所近くあることが分かってきたのです。こうした情報は、ウミガメ協議会の会員の方々からいただいたものも多いため、皆様にこの場を借りて感謝の意を表したいと思います。しかし、沿岸部には、まだまだ知られていないウミガメの墓があると思います。今後も、このような情報がありましたらお知らせくださいますようお願いいたします。

全国的な傾向については、まもなく考察する予定にしていますが、これまでの調査で、ウミガメの墓にはとくに集中する地域があることが分かってきました。大分県臼杵市、香川県一帯、兵庫県の淡路島、愛知県の知多半島、静岡県御前崎市、神奈川県三浦半島、千葉県銚子市、岩手県一帯、新潟県の佐渡島などです。私は、和歌山県の事例について、『和歌山県立博物館研究紀要3号』（1998年）で紹介し、まもなく刊行予定の『名古屋民俗叢書 4 環境とくらし』に収録された「知多半島のウミガメ埋葬・供養習俗」という論文では、知多半島の事例を考察しています。その他、千葉県銚子市のウミガメの墓については、成城大学の小島孝夫氏が、『海の民俗文化』（明石書店、2005年）などで取り上げて分析されています。その他の事例について、この連載のなかでも取り上げていきたいと考えていますが、今回は、すでに分析し

ている知多半島の事例を紹介してみたいと思います。

知多半島におけるウミガメの墓は、伊勢湾側、三河湾側あわせて23か所確認しています。知多市、常滑市、美浜町、南知多町、武豊町に見られますが、このうちとくに多いのは、半島先端部に位置する南知多町です。南知多町豊浜の田中憲治さんという漁師は、昭和54、5年ごろ、内海の沖でマメ網をしていたときに死んだウミガメがかかったといます。田中さんはオモカジから引き上げて船に積み、持ち帰りました。それまで血は出ていなかったのですが、陸に上げると血が出たといいます。田中さんは、このことを、カメが陸に上げてもらって喜んだ証拠と考えています。自分の家の寺へ電話したところ、住職が寺へ運ぶよう指示したため、2人で担いで行きました。裸だとかわいそうだと考え、毛布をかぶせ、海の方を向けてイケタ（埋葬した）といます。

これは、特別な事例ではありません。豊浜の漁師たちは、戦前から網にウミガメが入ると、生きていれば酒を飲ませて海に帰し、死んでいれば持ち帰って埋葬していたのです。もう一人、漁師さんの話を紹介しましょう。パッチ網の網



写真1 ウミガメを埋葬する場所
(現在は墓標のほとんどが倒れている)

藤井弘章（ふじい ひろあき）

1969年和歌山市生まれ。現在、国学院大学日本文化研究所の専任講師（民俗学）を務める一方、日本ウミガメ協議会特別研究員。



写真2 ウミガメの墓

元をしていた石黒長市さんは、昭和45、6年に「カメを曳いて」きました。自分の家の寺には埋葬するところがないため、峠の地藏さんの隣にイケタのです。住職に来てもらって、木の墓標を立て、酒をあげて供養したとのこと。峠というのは地名であって、実際の峠ではありません。漁港の見える海沿いの一角に地藏が祀られています。その横の空き地には、石黒さんのウミガメだけではなく、戦前から無数のウミガメが埋葬されたといいます（写真1）。自分の檀那寺に埋葬する場所があれば、そちらに埋葬することもあったのですが、そうした場所がない場合、石黒さんのように峠という場所に埋めていたことが分かります。この場所には、昭和50年ごろまでは、少なくとも11基のウミガメの墓標が建っていました。ウミガメの墓標は、この地域では人間が亡くなったときに建てる墓標とほぼ同じでした。墓標には、住職が「摩訶龍龜大菩薩」と書く場合が多かったようです（写真2）。死んだウミガメを埋葬するのに、漁を1日休んで、ウミガメを運んで埋葬し、住職を頼んでお経を読んでもらうというおおがかりな供養をしていたのです。こうして建立さ

れた墓は、埋葬した漁師（船）の個人のものとなります。したがって、その後、その場所へ大漁祈願にお参りに行く場合にも、自分が埋葬した墓へいくことになります。

このように、南知多町では、漁師の網にウミガメが入ることが多かったようです。この地域では、明治時代から打瀬網という船曳網漁が盛んになり、現在でも底曳網などの船曳網漁が盛んです。知多半島では、ウミガメの墓は明治末期から出現しますので、漁業の近代化とともに、ウミガメの混獲が多くなったことも考えられます。

それでは、なぜ漁師はウミガメが網に入っただけで死んでいた場合にわざわざ漁を休んでまでおおがかりな供養をしたのでしょうか。それは、1つにはウミガメが魚を連れてきてくれるという考えがあったことによります。それは、生きているカメを放す場合にも、「大漁させてくれよー」などと声をかけたり、甲羅にペンキなどで「〇〇丸大漁」などと書くことがあったという話で分かります。しかし、一方で、この地域の漁師にとってウミガメは恐ろしい存在でもあったようです。ウミガメを怒らせないために、死んだウミガメに対しても丁重に扱い、そうすることで自分の船に漁をもたらせてもらおうという気持ちが働いていたようです。

今回は、漁師が建立したウミガメの墓を取り上げましたが、知多半島には、漂着したウミガメを埋葬した墓もたくさん見られます。今回はこのことを紹介することにします。

南知多ビーチランドのウミガメたち

黒柳賢治

私が所属する「南知多ビーチランド」は、水族館と遊園地からなる総合海浜公園で、愛知県知多半島に位置している。愛知県でのウミガメの産卵地と言えば、表浜と呼ばれる渥美半島南岸、遠州灘に面した海岸線が有名だ。反対にここ知多半島は、年に1~2頭の産卵があれば良い方で、ストランディングも多くない。そのため、産卵頭数や孵化率など野生ガメについての調査は少ないが、卵から成体まで、日本ではなかなか見られない種類やサイズのウミガメについて調べることができる。

私が南知多ビーチランドに勤め始めた20年以上前、水族館でウミガメと言えばあまり人目につかない片隅で、時には銭湯の湯船にも似たタイル張り水槽で飼われていたりした。一方南知多ビーチランドは、産卵場も備えたカメ池(名前がちよっと・・・)を備え、当時としては画期的な水族館であったように思う。外部からの研究者も積極的に受け入れ、これまで多くの学生や研究者が訪れた。



図-1

図-1は、甲らに距離計を装着してプールを泳ぐアカウミガメである。距離計にはプロペラが付いており、遊泳した距離を算出する仕組みになっている。距離計を付けるためのハーネスは、ワイヤーで縁甲板に固定したが、その時に

開けられたドリルの穴は12年経った今も残っている。それはそれで興味深いこと。図-2は、他個体に噛まれて潰れた距離計。野生ではまずないと思うが、アカウミガメのアゴの強さがよくわかる。

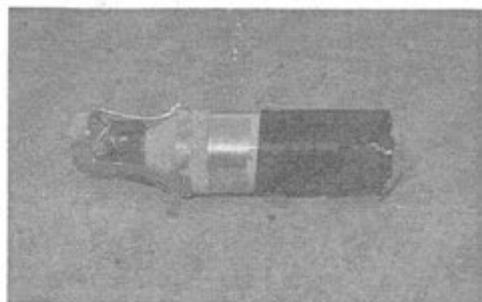


図-2

図-3は、エポキシ接着剤で水圧計を接着している3人の学生(当時)。左から南川氏、佐藤氏、田中氏。もちろん、野生での行動を調べるためだ。



図-3

また、胃内温度を測定するためのデータロガーを使った予備実験でのこと。記録を取るためにはロガーを一旦胃に入れ、ある程度したらまた取り出さなければいけない。その方法として、ロガーに付けたテグスを鼻の穴から出し、なん

● 黒柳賢治氏のプロフィール

● 南知多ビーチランドで飼育を担当して既に25年になる。魚類、イルカ、海獣類など一通りの飼育経験を持つが、ウミガメだけはずっと関わってきている。とにかく、「仕事のセンスが良い」というのは彼の為にあるような言葉で、どんな仕事でも、要領よく確実にこなす姿は憎らしい程である。八重山海中公園研究所（現、当協会黒島研究所）の研究員の時代に、内視鏡をカメのお腹に突っ込んで生殖腺で性を判別する手法を開発したことは知る人ぞ知る業績だし、それ以外にも研究費や設備のない環境にも関わらず、あげてきた多くの業績はウミガメ会議でもお馴染みである。私とつき合い始めた25年前は酒を飲まなかった黒柳氏だが、最近では自らビールを求めようになり、ますます円熟期に入ったといえる男である。当会の理事でもある。（文責：亀崎直樹）

とボタンに止めると言うのである。カメ自身なら傷付くわけでもないが、なんとも情けない顔であった（図-4）。



図-4

しかし、この話には続きがある。接続していたクリップが外れ、ロガーだけが胃に残ってしまったのである。すぐに内視鏡を使って確認しようとしたが、胃の入り口は湾曲しておりなかなか思うように進まない（図-5：中央に写っているのは顔のラインがシャープな頃の松沢氏）。



図-5

次にレントゲンを使って見てみると、ロガーの基板がはっきりと写った（図-6-7）。

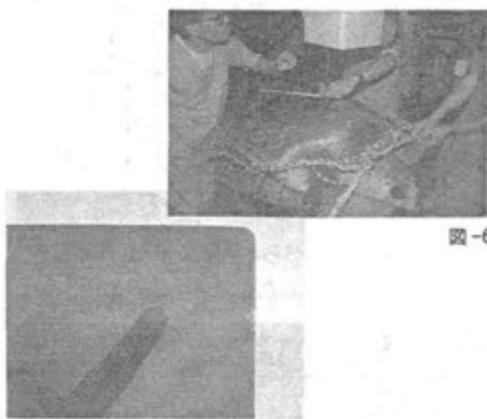


図-6

図-7

結局、カメ自身が吐き出してくれたが（図-8）、一時は冷や汗モノであった。しかし、これらにより装着方法の改良と内視鏡やレントゲン撮影の手法、12 cmものロガーを吐き出せる事などが明らかとなった。

最近では、神戸大の中田氏により脳波測定の実験も行われた（図-9：奇妙な形をした保定台は彼女の自作）。アカウミガメの脳は、その強大な頭部に比べ意外なほど小さい。しかし、彼女はみごと脳波を取ることができた。

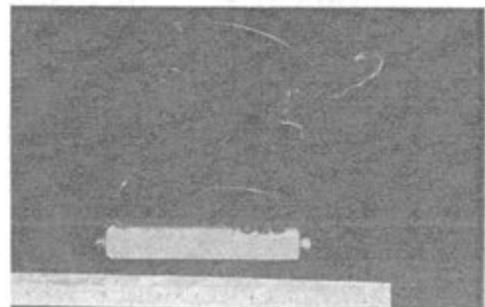


図-8



図-9

以前、心電図も調べられたが、カメがおとなしくしておらず苦労したことも（図-10）。



図-10

図-11は、アルゴス・トラッキングの予備実験のため、背甲に発信機を装着してプール内を泳いでいるアオウミガメである。



図-11

初めは、呼吸の時にどの鱗板が一番上に来るのか、どの程度の高さにすれば確実に電波が発射されるのか、などなど思考錯誤の状態であった。結局、廃材の亚克力を利用して2段積み台座を作った。その甲斐あってか、何度も位置を知らせてくれたが、一回の位置情報につき料金が発生するため、一部では経費が嵩むという声も。このアオウミガメは、稚ガメからビーチランドで育ったのだが無事、野生復帰できた様子で、発信が途絶えた後も目立つのか発見の情報が寄せられている。すべて、生存・再放流されているが、最後の確認は、放流から4年後のことである。

動物園や水族館は、一般に娯楽施設という印象が強く、特に民間の場合そのウエートが高いのも事実。しかし、教育の場であったり、調査・研究や人工繁殖の技術獲得にも力を入れている。南知多ビーチランドも例外ではなく、職員以外様々な学生や研究者を受け入れてきた。もちろん、私自身もガンバラねばと思うのだが。



図-12

ちなみに図-12は、精液採取実験の被検体に声をかける亀崎氏。笑顔でオスガメの下腹部をさする姿がとても印象的であった。

VADOO アイランドリゾートで

平本 真実子

みなさんはモルディブ共和国という国をご存知でしょうか？約1120余りの島からなる諸島国で、大変海が美しく、魚の種類が豊富でダイバーにはまさに、「楽園」のような国です。私は今年の3月に、大阪コミュニケーションアート専門学校を卒業しました平本真実子です。現在私は、この「楽園」にあるバドゥアイランドリゾートという一周徒歩5分の小さな島で、野生生物に携わる仕事をしています。

このバドゥは、モルディブの首都マレーから、ドーニと呼ばれるモルディブの伝統的な船で約45分程のサウスマレーアトールの端に位置しています。こんな小さな島ですが、今まで何度もウミガメが産卵に訪れています。モルディブは年中暖かい為、カメの産卵シーズンというものもなく、いつカメが産卵に上陸してもおかしくない状況です。私は昨年12月からモルディブで生活していますが、まだカメの産卵に遭遇していません。いつ来てくれるかと、毎日心待ちにしています。

バドゥアイランドには現在、保護・調査目的で一時的に飼育しているウミガメが14頭います。ここでは、2~3年の間飼育したカメに、番号付のタグをつけて放流する標識放流という調査を行っています。私がこちらに来てから、3頭のアオウミガメが海に帰っていきました。毎日世話をしていたカメが、元気に海に泳いでいく姿は大変感動的な光景でした。正直、少し寂しい気持ちもありますが、どこかの海で元気であればいいなと思います。

私の普段の仕事内容は、カメの世話と日本人のお客様を対象にしたフィールドガイドです。このフィールドガイドはお客様に喜んでいただけるだけでなく、私自身の勉強にもなっています。いつも自分自身の勉強不足が、身にしみま



すが日々精進していきたくです。休みの日には、海に入ってカメを探したり、海の中の様子を観察したりしています。先日、ぼんやり泳いでいたところ、カメの腹甲板を見つけました。残念ながら他のパーツは見つかりませんでしたが、この腹甲板の持ち主は、どういう一生をおくり、どのような経緯でここまで流れてきたのだろうと、しみじみと思いました。桟橋に立ってぼんやりしていると、タイマイが息継ぎのために水面から顔を出したりします。また、ある日突然、アオウミガメの子どもをモルディブ人スタッフから託されたり、傷ついたヒメウミガメの成体が保護されてきたりと、めまぐるしい日々の連続です。カメたちに水をかけられ、服をびしょ濡れにされたり、うっかり餌といっしょに指をかまれたりと悪戦苦闘していますが、彼らのなぜか憎めない顔を見ていると、今日も頑張ろうと思えてきます。今島にいるカメたちも、いずれは海に帰ります。彼らが、いつの日か産卵のために、この島に帰ってきてくれればいいなと思います。そして、その時にもまだ、この美しい海と自然が変わらず残っていることを祈らずにはいられません。

調査・研究

甲らの測定方法について

甲らの測定。毎年の調査で嫌というほど測定されている方も、それがまったく日常でない方もいらっしゃるのではないのでしょうか。これは、どちらの方にとっても堅苦しい読み物かもしれませんが、何かの時にふと思い出して手に取っていただけたら、と思いをまとめてみました。

ウミガメの研究を体系だてて進めていくうえで、個体の正確な計測は必要不可欠な条件であると考えられます。1990年以前、国内においては、それについての議論はほとんど行われておらず、各機関・個人によって、計測部位・方法が異なっていました。そこで、1990年、鹿児島で開催された日本ウミガメ会議で、日本のウミガメの大きさの測定方法が統一されました。

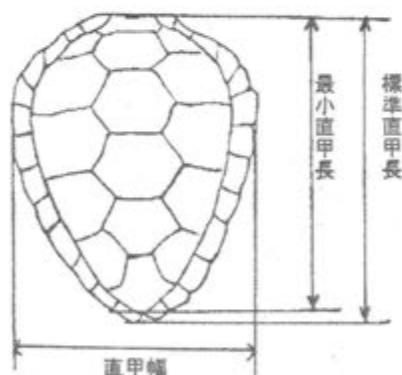
鹿児島ウミガメ会議で決められたこと

- ・計測は標準直甲長・最小直甲長・直甲幅をmmのレベルで計測する。
- ・測定する直線の長さは、水平の長さではなく、測定する両端の点の間の直線距離を採用する。
- ・測定器具は統一規格の牛体測定用のノギスを使用する。

標準直甲長 Straight Standard Carapace Length
最小直甲長 Minimum Carapace Length
直甲幅 Straight Carapace Width

曲甲長 Curve Carapace Length
曲甲幅 Curve Carapace Width

測定の箇所は左下の図で示します。



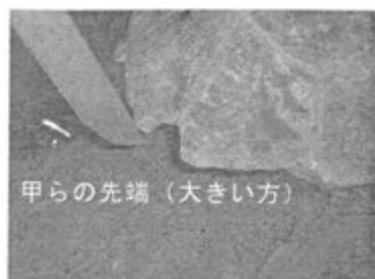
標準直甲長、最小直甲長、直甲幅の図



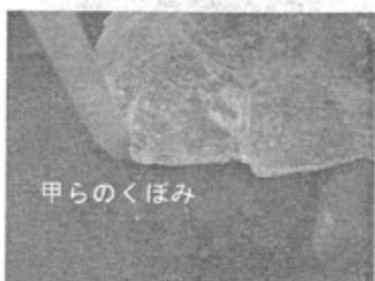
ノギスを用いて漂着個体を測定しているところ

ノギスによる計測方法

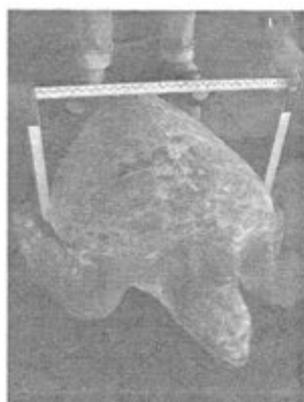
標準直甲長



最小直甲長



直甲幅



曲甲長（ノギスがない場合）



曲甲幅・・・甲らの幅が一番大きいところを甲らの丸みに沿って測ります。

事務局より

News!

ウミガメのご縁で・・・

佐賀周辺でウミガメ調査をやってこられた福田径子さんが、この5月7日に平戸の沖の度島の赤木正幸さんと結婚されました。鹿児島県野間池から放流したアオウミガメが、平戸で発見されました。連絡をいただいた漁師さんの定置網では時々ウミガメが捕れるとのこと、長崎の引地さんと佐賀の福田さんに行ってもらうことにしました。そこで、福田さんと会った漁師の綾香さんが、友人の赤木さんを紹介して、今回の運びとなったとのこと。馴れ初めも、カメの縁です。幸せをお祈りします。(亀崎直樹)



ご夫婦の生活を支える漁漁丸と新しいご夫婦。
右端は長崎の引地さん、左端は亀崎

「everblue × レミニッセンス コラボエコバック」

少しでも自然に優しいものを・・・

そんな思いから生まれた everblue オリジナルグッズ。

こだわった素材やディテール、誰もが手に取りやすいデザイン。

このバッグの売上の10%が日本ウミガメ協議会の活動支援のため寄付されます。

代官山にあるオシャレなアパレルブランド「レミニッセンス」。海とサーフのテイストを感じる爽やかなカジュアルブランド。今回のエコバックはそんなレミニッセンスと everblue のコラボレーションでうまれました！そして、なんとこのエコバックを持ってレミニッセンスのショップにお買い物に行くと5%のディスカウントをしてくれるとのこと。嬉しいですね。こちらの商品は、お届けまでにお時間がかかります。あらかじめご了承ください。



1,000円

ご購入は・・・

レミニッセンス、代官山のショップで。

エイ出版社の通信販売サイト www.ei-shop.jp で。

当金のホームページでもリンクさせていただいています。

5年ぶりに明石で産卵！

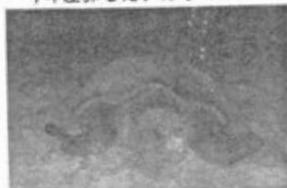
以前に明石で産卵があったのは、2000年。関係者が、今年こそはと待ちにまっていたところ、5年ぶりに松江（林崎）海岸で産卵が確認されました。産卵日は、6月22日と7月13日の2度でした。

明石市のウミガメについては、

明石市土木部海岸・治水課、国土交通省姫路河川国道事務所、
八木八遊会、明石西ロータリークラブ

の方々が携わっています。

今年産卵したアカウミガメ



提供：明石市

事務局の主な動き

2005年1月～7月末まで

- 1/17-23 アメリカ サバンナでの「第25回国際ウミガメ会議」に参加
- 1/28 インターンシップ生 入所式
- 2/2 HP刷新
- 2/20-26 モルジブタイマイ調査
- 2/26 大阪湾フォーラムに参加
- 3/2-4 ハワイにて北太平洋アカウミガメ会議に参加
- 3/8-13 ベトナム調査
- 3/14 日本ベッコウ甲協会委員会に参加
- 3/31-4/4 日本水産学会発表
- 4/16 ざっくばらんにウミガメ座談会～キララ・ソララを振り返って～
- 4/25 バタゴニア・アースデーパーティーに参加
- 5/21 ひらかたNPOセンター登録団体PR大会に参加
- 5/27 「中央環境審議会地球部会国際協力専門委員会に関する説明・意見交換会」に参加
- 5/28 平成17年度 徳島ネイチャースクール第1回目開催
- 6/18 SPLASH-Asia 国際シンポジウム in Tokyo 「北太平洋のゼトウクジラを遡る」開催
- 6/19 近畿の環境団体情報交流会に参加
- 6/20 ウミガメ保護研究会（屋久島観光協会）に参加
- 6/30 愛地球博に参加
- 7/11 成ヶ島で講習会（由良小学校）
- 7/12 日本ベッコウ甲協会委員会に参加
- 7/16-18 相良自然環境開催（カメハメハ王国・日本ウミガメ協議会共催）
- 7/18 成ヶ島シンポジウムに参加
- 7/19-24 海洋開発研究機構なつしま航海・ハイバードルフィン調査
- 7/27 アースウォッチ「奄美諸島のウミガメの保全」チーム1開催
- 7/28 「環境政策提言に向けた意見交換会」に参加
- 7/30・31 IUCN 親善大使イルカさんコンサートに参加

第16回日本ウミガメ会議（黒島会議）のご案内

16th Japanese Sea Turtle Conference in Kuroshima

2005年11月18日（金）－20日（日）

次回のウミガメ会議は、初めて八重山で開催することになり、八重山の離島、黒島での開催が決定しました。多分、全国会議がこのような離島で開催されるのは、これが初めてだと思います。黒島での開催の話を見せていただくと、皆さん不思議に思われるようで、「なぜ、石垣あるいは那覇ではないのか？」と聞かれます。確かに、黒島には宿泊施設は少なく、交通の便は悪く、なにより旅費がべらぼうにかかります。利便性を考えると、離島ではなく、石垣あるいは那覇でとなることは仕方ないかもしれません。しかし、ウミガメが産卵に来るのは黒島ですし、それを30年以上も昔から調べ続けてきたのは黒島なのです。我々はそのような地域のこだわりを無視するわけにはいかないのです。黒島と言えば、沖縄の中でも芸能が盛んな島です。黒島の皆様にもご協力いただき、会議の中でも芸能をたくさん取り入れたユニークな会議にしたいと考えています。是非とも、皆様のご協力をお願い申し上げます。

場所：沖縄県八重山諸島黒島

主催：日本ウミガメ協議会・黒島公民館

後援：竹富町・沖縄県・沖縄県教育委員会・環境省・

国土交通省・水産庁他

協賛：現在募集中

日程：18日 公開シンポジウム

19日 研究発表と民俗芸能

20日 新城島、西表島のウミガメ産卵地見学ツアー
閉会式

黒島の全景



提供：竹富町

詳細は同封の別紙をご覧ください。

着任のご挨拶（黒島研究所 亀田和成）

はじめまして、亀田和成です。このたび黒島研究所で勤務させていただくことになりました。育ちは新潟県ですが、寒いのが嫌いで高知大学に進学しました。大学では魚類分類学を専攻し、理学研究科修士課程を修了しています。趣味は釣りですが、変人の域に達してしまったので、最近は控えています。魚以外の生物も好きで、暇があれば海・山・川をうろついています。黒島は自然も文化もすばらしい場所と聞いているので楽しみです。黒島での研究は、タイマイの餌となる海綿の分布と飼育および黒島における生物相のリストを作成することです。他にも自分でテーマを見つけて研究をするつもりです。



インターンシップの採用について

当協議会が教育顧問をしている、大阪コミュニケーションアート専門学校を今春卒業した4名のフレッシュマン（うち2名はウーマン）を、1年間のインターンシップ生として採用しました。彼らには、ウミガメを始めとする生物の調査・研究の基礎や、社会人としてのマナー・ルール、組織人としての規律などを修得してもらいます。時には電話当番もさせますので、対応にたどたどしいところや、不手際があった場合は、事務局の指導の不行き届きです。何とぞご容赦いただきますよう、お願い申し上げます。

江口英作（えぐち えいさく）

京都府城陽市生まれ。

ウミガメとの出会い：黒島研究所での研修



仲村貴生（なかむら たかお）

大阪府枚方市生まれ。

ウミガメとの出会い：高知県室戸市での調査

村井薫（むらい かおる）

大阪府堺市生まれ。

ウミガメとの出会い：小笠原海洋センターでの実習



山崎千亜希（やまさき ちあき）

高知県高知市生まれ。

ウミガメとの出会い：高校のときの職場体験（桂浜水族館）

職員の異動について（大阪事務局 事務局長 水野康次郎）

大阪事務局長の水野です。今年の春より、奄美諸島での調査及び大阪事務局での活動を認められ社会人入試に合格し、筑波大学大学院に入学しました。現在、勉学に励み、ウミガメ調査なども同時に行っています。夏休みの7月以降は、昨年同様、大阪事務局で仕事をし、奄美諸島などの調査も行います。皆様には、いろいろとご迷惑をお掛けすることになるかと思いますが、今後ともご指導ご鞭撻ををよろしくお願い致します。

新室戸号を譲っていただきました。

2003年の7月、神戸市兵庫区の協力自動車修理工場様の御好意で、高知県室戸市の調査で使う車を譲っていただきました。潮風香る海辺での調査に毎日フル活用し、大きな故障もなくこの夏任期満了を迎えました。そしてなんと！協力自動車修理工場様から後継車として、もう一度車を譲っていただきました。私どもの厚かましいお願いを聞いていただき、有難うございました。心よりお礼申し上げます。



任期満了を迎えた旧室戸号
お疲れさまでした！

中国語ホームページ近日公開！

会員の中井陽子さんがボランティアで、当会ホームページを中国語化してくださいました。中井さんは現在、上海にいらっしゃるとのこと。とてもお忙しい中、有難うございました。近日公開の予定ですので、皆さまどうぞお楽しみに。

いざという時に、携帯サイト

ウミガメの漂着などを見つけた時、その情報を携帯から簡単にお送りいただけるよう、携帯サイトを立ち上げました。情報入力フォームがありますのでそちらに記入してお送りください。また、携帯で撮った写真を添付していただけたらなお助かります。もちろん今まで通り、電話、FAX、E-mailからでも大歓迎です。携帯サイトでは、当会会員のデザイナーEATRIXさん(山路直樹さん)ご提供の壁紙をダウンロードすることも出来ます。ぜひ御利用下さい。

発見日時
2005年
05月
30日
目撃した場所
(県、町、海浜名)
ウミガメの状況
標識の有無
○無し
○有り
標識番号
.
.

携帯より、当会HP(<http://www.umigame.org>)にアクセスしてください。TOPページの最初に「携帯サイト」の入りがります。

平成16年度

日本ウミガメ協議会会計報告

平成15年11月1日より平成16年10月31日まで

単位：千円

収入の部	
会費	2,300
助成金・補助金	23,150
事業委託費	29,193
ウミガメ会議参加費・協賛金	2,754
寄付金	1,714
その他収入	18,313
収入の部合計	77,424

支出の部	
自然環境保全事業(調査・研究)	36,984
小笠原海洋センター運営事業	15,921
黒島研究所運営事業	13,928
ウミガメ会議開催費	2,311
情報提供事業(遠報・会報)	403
うみがめニュースレター発行支援	200
管理費(人件費・事務経費等)	10,747
支出の部合計	80,494

当期収支差額	-3,070
前期繰越収支差額	9,718
次期繰越収支差額	6,648

各費目の内、主なものは次のとおりです。

助成金・補助金収入	
東京都小笠原村補助金	12,496
環境再生保全機構地球環境基金	3,908
地球環境日本基金助成金	1,300
経団連自然保護基金助成金	1,200
セブン・イレブンみどりの基金	1,100
大成建設歴史・環境基金助成金	800
損保ジャパン環境財団助成金	600
イオングループ環境財団助成金	500

事業委託費収入	
日本ベツ甲協会タイマイ保護事業	9,500
環境省ウミガメ行動追跡調査事業	9,029
自然環境研究センター・モニ1000	4,001
小笠原村・海洋センター事業	1,699
環境省黒島ウミガメ調査業務	1,500
徳島県自然環境協力員養成業務	600

ご寄付をいただいた方々

松村勇太、内田保、大地昭、大江里奈、
 置鮎純子、安田正治、吉川信博、藤山純由、
 近藤康男、坂本亘、柴山信行、関口謹治、
 株式会社みや、坂野勝也、島啓介、牧野伸一、
 犬塚誠、嶋田起宣、松本憲二郎、半谷昌己、
 護得久明美、大野知多夫、植松正宏、山田輝一、
 安井隆弥、松平和子、宮内有子、ロングホーン・
 エマ、照本善造、酒野光代、永田安月子、
 清水智仁、株式会社エイ出版社、切手美佐、
 通事達次、岩崎伸治、クスダタクヒロ、鎌田武、
 藤井隆司、成ヶ島を美しくする会、料亭花月、
 端田宏子、塩澤寛樹、波多野真樹、ヤマトカナ、
 田畑健一 高田敬子、中野陸夫、日高安義

7月末まで。

順不同、敬称は省略させていただきました。

会費の納入について(お願い)

マリンタートラ第6号でお知らせしましたと
 おり、年会費の納入時期を毎年4月とさせていた
 だいております。本年度会費をまだ頂いていない
 方につきましては、郵便振替用紙を同封しており
 ますので、ご納入いただきますようお願い申し上
 げます。

また、銀行預金・郵便貯金からの自動振替によ
 る納入を始めています。既にお申し込み頂いた方
 は、ありがとうございます。まだお申し込みで
 ない方も、来年度からご利用できます。ご希望さ
 れる方は、電話・ファックス・E-mail等で事務局
 へお申し込み下さい。折り返し自動振替の申込用
 紙をお送り致します。

オリジナルグッズ ○ ○ NEW!!



オサガメピンバッジ
525円



オサガメストラップ
630円



タイマイストラップ
630円



アカウミガメ
モバイルクリーナー
420円



オリジナル手拭い (協議会文字抜き)
525円



オリジナル手拭い (協議会文字あり)
525円

価格は全て税込みです。

編集後記



編集長：矢野 由紀

大変お待たせしました。季節の変動に合わせ、編集後記が何度も書き直されていきます・・・毎日、暑いですが夏バテされていませんか？今年の4月には、インターン生4名が入り、何かと賑やかな事務局でした。が、あっという間にウミガメのシーズンに入り、気がつくともみんな出払っています。今回の表紙を描いてくれた堀内さんは、実は私の中学時代からの友人です。絵が無くて、どうしようか困っている時、助けてくれてどうもありがとう。皆様、表紙の絵をお待ちしています。表紙の順番待ちがでて困ってしまう日を楽しみにしています。

マリントラター (日本ウミガメ協議会機関誌)

発行日 2005年8月10日

発行 日本ウミガメ協議会事務局

〒573-0163 大阪府枚方市長尾元町5-17-18-302

電話：072-864-0335

FAX:072-864-0535

URL:<http://www.umigame.org>

E-mail:info@umigame.org